

目次

序章

一 はじめに……………7

二 源氏物語における〈もののけ〉の位置……………8

三 基点的研究の検証……………14

四 〈もののけ〉研究の動向から……………18

五 課題と目的および本書の構成——付・各章と初出との関係……………22

第一章 〈もののけ〉とは何か……………25

一 はじめに……………25

二 モノとケ……………27

三 物怪および怪……………29

四 邪気・霊気・物気……………33

五	〈もののけ〉の原義	35
六	〈もののけ〉の語義と用法	39
第二章 〈もののけ〉への対処		
一	はじめに	47
二	発症から快復までの概観	48
三	〈もののけ〉発症と見立て	51
四	発症原因の判断と対処法の選択	54
五	験者による調伏——直接方式	58
六	霊物を駆り移す——霊媒方式	62
七	護法のふるまい	66
八	顕露と退散	70

第三章 心の鬼の棲み処		
一	はじめに	75
二	二つの辞書における「心の鬼」	77
三	「疑心暗鬼」説検証	80

四	鬼神のさまざま	84
五	冥府の使者と地獄の獄卒	87
六	目に見えぬ鬼としての心	92
七	心という鬼	97

第四章	心の鬼のふるまい	103
-----	----------	-----

一	はじめに	103
二	「心の鬼」の扱いの検証	105
三	源氏物語「心の鬼」の検討状況	109
四	「心の鬼に——思ふ」型	114
五	その他の用例と辞書の記述	119
六	源氏物語読解に向けて	122

第五章	紫式部集の〈もののけ〉詠	125
-----	--------------	-----

一	はじめに	125
二	小法師Ⅱ護法説と反響	126
三	小法師Ⅱ護法のはたらき	131

四	「亡き人に」「ことわりや」の呼応	137
五	回帰する批評	143

第六章 葵卷の〈もののけ〉—— 顕露まで

一	はじめに	149
二	葵上の〈もののけ〉発症	150
三	〈もののけ〉の調伏	154
四	「いきずたま」観念の基盤	157
五	魂のふるまい	161
六	心のはたらき	166

第七章 葵卷の〈もののけ〉—— 顕露以後

一	はじめに	173
二	生霊顕露	174
三	芥子の香	177
四	〈もののけ〉取り入る	181
五	心の鬼に	184

六	光源氏の選択	187
第八章 若菜下巻の〈もののけ〉		
一	はじめに	193
二	発症から顕露まで	194
三	死霊顕露	197
四	天翔る霊	201
五	調伏と慰撫と	205
第九章 宇治の〈もののけ〉		
一	はじめに	213
二	「白きもの」の発見	215
三	横川の僧都の修法と加持	219
四	〈もののけ〉顕露から快復へ	223
五	死霊の語り	228
六	宇治の冥の空間	233

第十章 光源氏と〈もののけ〉……………241

- 一 はじめに……………241
- 二 光源氏——その聖なる光輝……………241
- 三 光源氏——その罪業……………246
- 四 栄華に差す影……………250
- 五 〈もののけ〉を問い直す……………254
- 六 〈もののけ〉の発動から退散まで……………258
- 七 源氏物語における〈もののけ〉表現の特徴……………264
- 八 光源氏につきまとう影……………271

あとがき……………277

索引……………001
(左)

序章

一 はじめに

平安時代の仮名文で、枕草子、源氏物語以前の作品に「もののけ」という言葉の使用は限られている。かげろふ日記上に一例、大和物語第一〇五段に一例、うつほ物語「吹上 下」巻に一例と少ない。しかも、大和物語では、これを「わづらふ」病者と治病に当たった僧の恋愛のきっかけ、うつほ物語でも、同じくあて宮に阿闍梨の忠こそが恋文を贈るきっかけにすぎず、それ自体が中心になることはない。〈もののけ〉という言葉は、はやく貞信公記に「五節一人忽煩物氣」(延喜一九年一月一六日)と見え、これより公家日記にもつばら「邪氣」(他に「靈氣」)の語で盛んに書きとめられている。これに付かれるとやつかいではあるが、げんざ験者と呼ばれた僧による修法と加持をもって対処する、貴族社会にはありふれた事象であった。

枕草子(三巻本)は、〈もののけ〉を四箇所にわたって取り上げている。ただし、〈もののけ〉を病み患うことにはなく、これを調伏する験者に視線を注ぐ。調伏の験が現れない様子(第二二段)、調伏に熱意のない態度(第二五段)を戯画化して記述し、験が現れず苦慮する姿(第一五〇段)に逆に同情の目を向けるなど、貴族社会のいわば治病の風俗として描き出している。能因本第三一九段「前の木立高う」では、ここにも病者の姿は直接描かれず、験者が女の童を「付き人(靈媒)」にして護法を用いて調伏に導く過程が詳細に記述される。ただ、時、所、人の固有性は希薄で、一回性の事例の経験とか観察とかではなく、〈もののけ〉調伏というできごとを

標準化して記述したもののようには読まれる。

一方、紫式部の〈もののけ〉に対する関心は至って深く、これに向ける視線は鋭くまた独特である。紫式部の遺した紫式部日記、紫式部集、源氏物語のどれにも〈もののけ〉が取り上げられている。

紫式部日記は、式部の仕える中宮彰子が、寛弘五（一〇〇八）年秋に土御門殿で一条天皇の御子を出産する時の記録を含んでいる。安産のための五壇の修法、各寺院での誦経、多くの験者を集え、これにそれぞれ付き人（霊媒）を添えて〈もののけ〉調伏の加持が大がかりに営まれたことが記される。験者たちの陀羅尼を誦する声、霊物を駆り移された霊媒たちの叫喚の一方で、霊物が移らないと言つての騒ぎ、こうした混乱に式部自身も巻き込まれて行く様の描写は精細をきわめる。もとより、この記事は皇子の出産という作者の主の大事で、これを左大臣道長一門がこぞつて成し遂げる活動の記録にほかならない。〈もののけ〉を思う中宮の姿は、おのずと読者の目から遠ざけられることになる。また、霊媒の叫びを通じて知られたはずの、出産を妨げようとした霊物どもの正体にも言及しない。それでも、産を「今とせさせ給ふほど、御もののけの妬みののしる声などのむくつけさよ」という表現は、簡潔であっても道長の栄華の背後に潜む影の存在が表し出されている。それは、平家物語巻第三「御産」、中宮徳子の出産にあたり、〈もののけ〉調伏に後白河法皇も加わって、「今現はるるところの怨霊どもは、皆我が朝恩によつて人となッし者どもぞかし。（中略）速やかにまかり退き候へ」と祈誓する場面と照らし合わせると明らかであろう。これに対して、紫式部日記を資料に書かれた栄花物語巻第八「初花」は、「いたく騒ぎて、平らかにせさせ給ひつ」といちだんと具体性を捨象し、そこへは読者の視線を向けさせない。

二 源氏物語における〈もののけ〉の位置